

科学的と非科学的

東京大学名誉教授 戸 莉 義 次

鈴木食糧研究所長だった故鈴木忠治郎氏は押麦機械や搾油機械を発明して農業界にも貢献の大きかった人であるが、食糧問題や国民体位の向上に強い関心を抱いていた。生野菜を搾ってジュウスとして飲むジュウサーは、今でこそ大手メーカーが電気製品として生産しているが、もとはといえば鈴木所長の発明である。

鈴木所長はこれといって学歴はないが、その発想は理詰めであり科学的である。学者は研究してビタミン A, B, C を発見し、その効果確認や合成の成果に陶醉し、業者は工場生産にもちこんで量産普及により社会に貢献するとともに利潤を追う。大衆は科学の成果を信じて疑わない。しかし鈴木所長はそれらは真理の 1 部であって、未だ発見されないビタミンその他がどれほどあるかは不明であり、この限りではそれらを総合的に全部含む野菜のジュウスを用いるのがむしろ科学的と考えるのである。

一見科学的に見えるビタミン剤利用は案外非科学的で、素朴に野菜ジュウスを服用する方が却って科学的との考え方は、100% 賛成とまではいわないにしても、科学技術に志す者の心してよい教えと思う。かゝる発想のもとに開発された手廻式の泥臭い姿のジュウサーは長い間三越デパートの 1 隅で紹介されていたが、人目を余り引かないまゝに、大企業が鈴木所長のアイデアだけを載いてしまったようである。

小麦の栽培は 15,000 年前に始ったという。野生時代を入れれば何万年も前から生き続けたか判らない。永久ともいふべき長期にわたり風雪に耐え、病害虫を克服してきた作物体内には思いもよらぬ強靱な要素が含まれているにちがいない。作物や雑草を薬剤撒布の単なる反応対象物とみず、数万年の長きに累積した適応遺伝因子の集合体として、謙虚にその反応を追究し、天然物分析の極致に到達したい。

植物生育調節剤の役割

農林省農林水産技術会議研究参事官 長 谷 川 新 一

生物を利用して生産を行なう農業を工業とそのまま比較することには幾多の問題があるが、両者の技術の発展を比較してみると、後者においては目的とする生産物を造る機械そのものの果す役割が非常に大きいように思われる。従って研究の重点も機械の開発・改良におかれるのは当然で、例えば紡績業であればより効率のよ

い紡績機械を作ることが研究課題である。農業の場合この機械に当るものは作物や家畜であり、能率のよい機械を作り出すのは育種の役割である。そして工業の場合程顕著ではないが、新しい品種が生産発展の契機となっている例は多い。その意味で育種の仕事はやはり試験研究の中心でなければならないと考えられるが、戦後はむ